



天文資料

2018年 4月号

平成30年度 第1号 (4月号)

平成30年 3月17日

発行：佐世保市少年科学館

佐世保市少年科学館



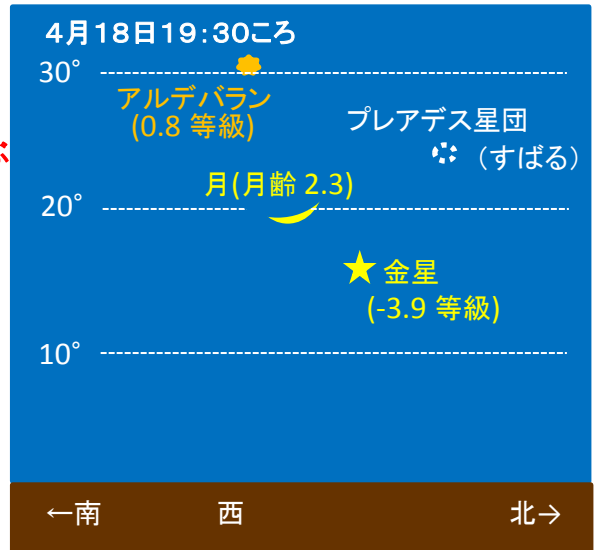
＜今月は「4月こと座流星群」が極大、金星は夕方見えやすくなる＞

4月こと座流星群は、4月23日(月)の3:00頃に極大を迎えると予想されています。この日の月は上弦、夜中過ぎには沈むので、極大の時間帯は、月明かりもなく良い条件となります。放射点※1は、こと座の1等星ベガの近くにありますが、こと座は4月下旬になると夜更けには北東の空高く昇るので、流星が見つかりやすくなります。

一方、夕方に見えるようになった金星は、地球から見える位置が太陽から離れつつあり、4月に入るとさらに見えやすくなります。特に18日(水)には月齢2.3の細い月と並ぶ様子が見られます。夕方月に次いで明るく輝く宵の明星金星は、10月初めころまで見ることができます。※2

※1: 流星群は、ある1点を中心に放射状に出現する。その中心点を放射点という。放射点のある星座、またはその近くにある星座の名前を頭につけて、「〇〇座流星群」と呼ぶ。

※2: 金星は、10月25日に太陽と地球の間に入り込む「内合」となり、この日付近は見えない。11月半ば以降は、金星は明け方東の空に見える「明けの明星」になる。



＜太陽系外から飛来した天体「オウムアムア」＞

2017年10月、ハワイ大学のパンスターズ1望遠鏡は、太陽系外から飛来した天体を発見しました。この天体は、9月9日に太陽の約3700万kmの地点を通過し、10月14日には地球に約2400万kmまで接近しました。当初は、彗星または小惑星と考えられていましたが、データを集めて軌道を詳しく計算したところ、太陽系の外から飛来したことがあきらかになり、太陽系内で特定された史上初の恒星間天体となりました。そして、研究グループは、この天体を「オウムアムア」と名付けました。オウムアムアとは、ハワイ語で、使者・斥候を意味し、「太陽系外からやってきたメッセンジャー」という思いが込められたネーミングです。



オウムアムアの想像図(提供: 欧州南天文台)

この天体は、7.3時間の周期で明るさが

19.7等級から27.5等級まで大きく変化

していることから、非常に細長い天体であると考えられます。長さは約400m、それに対して幅は10分の1以下です。このような天体は、太陽系の中には今までありませんでした。オウムアムアはこのあと2018年5月には木星軌道を、来年2019年1月には土星軌道を超えて太陽系を後にし、ペガス座の方向に向かいます。

参考文献: NPO長崎県天文教会発行

「NAS速報 No. 235」

四月下旬ごろからは、明け方東の空に見えます。夕方の金星と水星の写真を掲載します。水星は、

＜水星が夕方西の空の金星とともに輝いている＞

